

楞嚴院廿五三昧結衆過去帳

比叡山横川の楞嚴院で催された廿五三昧会の会衆の過去帳である。廿五三昧会は源信の『往生要集』に影響を受けて発足した僧侶の念佛集団の一で、平安中期淨土思想の展開の中で注目される宗教活動である。この会の会衆に関する資料は、人名のみ列記した『二十五三昧根本結縁過去帳』および本書の略本『首楞嚴院廿五三昧結縁過去帳』（共に『恵心僧都全集』第一巻所収）があるだけであった。本書は鎌倉期の写本であるが、広本系であり、本書の発見によつて略本（流布本）の位置付けだけでなく、より多くの会衆の行業と没年が明らかとなつた。さらに慶滋保胤著『日本往生極樂記』にはじまる平安時代の特色ある往生伝に新しい資料を加えることになった。昭和四十五年度に当部から『平安朝往生傳集』の名でコロタイプ出版されたが、少部数で、解題には釈文が付されなかつたので、ここに紹介する次第である。

はじめに序文があり、ついで総計五十人の会衆を没年順に、没年（月日）、生年を記し、そのうち往生業の顯著な十七人についてその行業を記している。略本はこのなかの五人を順序を変えて抜書したものである。序文は長和二年（一〇一二）七月十八日に記されたもので、本文第一番

目は寛和三年（九八七）正月十二日没した祥連大徳で、五十一番目は長元七年（一〇三四）正月二十四日没した前權少僧都覺超である。最末の覚超の没年は、序文が書かれた年から二十二年後であり、書き継がれたことが知られる。序文の起草時に相当する本文の最後は、四十二番目の良陳阿闍梨（長和二年三月廿八日没）で、その記文のあとに「結衆外加記二人」と注記しており、会衆外の二人を含めて計四十二人の過去帳が最初に書かれたことになる。序文にも会が寛和二年（九八五）に結成され、それから二十八年経過した長和二年の今年まで四十二人の過去者を出したと記している。四十三番目以下九人がその後書き継がれることになるが、四十三番目良範大徳（長保二年没）、四十四番目仁儕大徳（寛弘五年没）は、没年から見れば最初の部分に書き入れられるべき二人で、これが会衆外かとも思われる。ただ、この二人はいわゆる「根本結縁衆」中にも人名が見えるので、当初何等かの理由でもれ追記されたものか。つぎの聖念阿闍梨以下七人は序文起草時以後で没年順に配列されている。この中通算四十六番目が前權少僧都源信である。本書の著者は会衆の人と思われるが、明徴がなく不明である。卷末にある本書書写者の慶政

は、一説として、最初の部分を源信、書き継ぎを最末の覚超とする説を記しているが、いまのところこれを証するには至らない。

書誌は、縦二十四・七釐、横十六釐、列帖装一冊。僧慶政写。料紙は楮

斐交ぜ漉紙、本文表紙共紙、一括り六枚、三括りで一冊をなす。表紙左

上部に小さく「楞嚴院廿五三昧過去帳」（本文同筆）と直か書する。本文

一面八行、一行十八字前後、墨付三十二丁、白紙二丁、巻末に寛喜二年

（一一三〇）僧慶政の書写奥書、および慶長十一年（一六〇六）九条兼孝の識語を付す。九条家旧蔵本、函号九一三六。書写者慶政（一一八九一二六八）は、九条良経の男説が有力。証月房と号す。三井寺に入寺、能舜、慶範、行慧、延朗等に師事した。建保五年（一一一七）頃入宋、嘉禄二年（一一三六）頃西山法華山寺を創建、高山寺の明惠と親交があった。法隆寺の修復に尽力、往生伝や縁起類の書写に努め、本書書写もその一環である。『閑居友』の著者に擬され、『比良山古人靈託』『法華山寺縁起』『漂到流球国記』の著作が知られている。また、識語の筆者九条兼孝（一五五三一一六三六）は、種通の男、極官は、准三宮、左大臣、

関白、慶長九年（一六〇五）出家して円性を名乗る。

凡例

一、使用漢字は、異体・略体を正字に改め、常用漢字・通行漢字のある

ものは適宜これを使用した。

一、便宜読点を付し、丁替りは「一オウ」の形で示した。

一、編者の註は（ ）で示した。

一、流布本（恵心僧都全集卷一所収、首楞嚴院廿五三昧結縁過去帳）に見えるやや長文の異同についてのみ、（補12）として、末尾に参考のため掲出した。

（平林盛得）

〔表紙外題〕
〔表紙内題〕
楞嚴院廿五三昧過去帳

〔表紙外題〕
〔表紙内題〕
楞嚴院廿五三昧結縁過去帳
長和二年始記
右結縁念仏始自去寛和二年至今年、修來廿八年也、結縁之初、一衆共誓云、我等若適往生極樂、依自願力、依仏神力、若覓、若夢、示結縁人云々、然廿八年間、祥連大德為始、良陳闡梨為終、過去者四十二人也、此中或有臨終用心、死後夢想、頗似結縁之本願者、如最初祥連、最後良闡梨^{ミオ}等也、須将来記而伝之、然猶夢多虛妄、未必然也、事似昔願、未必不然、進退惟谷、難載翰墨、今僉議云、我等雖無智行、而求淨土、聞深遠事、還可退屈、聞淺近事、自生隨喜、故惣作過去帳、粗勒見聞、將励愚情云々、見者得意、莫妄嘲嘯矣、

祥連大德
生年六十五
正月十二日

智解稍少、口業不調、外人不知其有道心、然僉^{ミオ}發往生願、久修西方業、其所作者、毎日三時修六根懺法、又転読法花、般若經、毎月十五日断食、一日一夜一心念佛、又近臨終三ヶ年、永隔交衆、一心念佛并修印仏法、配十万億國每國印一仏、祈願云、我所印仏在彼之國、令我無留難、必往生極樂云々、其間有此結縁、略事點結衆、祥連非數、即來語云、祥連雖非善

人、聊有所思、欲預結衆、請垂慈悲云々、依請入了、即隨喜云、我雖愚暗^三、久修念佛、但恐臨終不值善友、幸有此事、深生隨喜、只是祥連宿善之所感也云々、入衆以後、弥發道心、結緣之役、觸事有勤、但未誦阿彌陀經、仍始詣誦了、不久受病、結衆結番、昼夜念佛、結緣最初之勤、衆人皆懃懃也、彼歡喜云、年來欣淨土、今遇善知識、決定無疑、必遂本意、此病有必死相、更不求存命也云々、其後少惱、正念命終、々々之後、覺超阿闍梨夢云、有人云、祥連者智義也、賢義也、推之下品歎云々、此夢不明、亦^三未普告、爰故對馬守少楳顯親^{彼時為算得業生}來宿故戒緣大德房、其夜夢云、有人云、此院有結緣念佛事、結衆中有一僧、名祥連、既生極樂、其由告覺超了、汝知不、答不知、抑覺超在何處乎、彼人答之以指示方、夢醒之後以事問人、冥事難知虛實、顯事只如所夢、以顯知冥人不敢疑、因茲結緣念佛興隆
弥盛、
(流布本第二) 貞久大德永延元年月日命終 生年廿五

聲彌高大、看病結衆相共加声、即又示云、起可履地云々、人不得意、問云、何故云爾、又云、猶可履之云々、仍私師仁澍大德隨病者言、起履地了、告云、履了有何意乎、病者答云、我所臥地猛火宛滿、焚燒我身、人亦然歟、諸人始得意、皆答云、不然、病者云、若爾我受他生、既墮地獄也云々、大衆流涕、相共念佛數十遍、了病者声絕、良久示云、有人駁我遂入火坑、依然念佛火滅了、然是最後、^四不違具陳、只須念佛、不得他言云々、大衆聞之、悲喜相交、流淚念佛、病者氣絕矣、
豪源大德^{永祚元年九月十日命終 生年廿八}
感晨大德^{永延二年月日命終 生年廿六}
已上無事、故不記之、下去准之、
妙空大德^{永祚元年十一月十一日命終 生年四十八}

智解雖淺世執猶輕、身雖非練行心猶欣淨土、每日所作念佛一萬遍、亦修阿彌陀供養法、近于其臨終、^四有結衆之望、梵照阿闍梨以自處讓之、有時間源信僧都云、我有往生願、不能修行、以何可遂本意乎、僧都示云、有造丈六仏像生淨土者、可勤此事^{慈鏡阿闍梨造丈六像 生鬼率以之為例}、即以唯諾、仍發願造丈六阿彌陀仏像、欲為結緣念佛本尊、其功未了其命早尽、即今花台院仏是也、彼生前自夢云、有一大集会处、即有一人、彼諸人中撰念佛者、計度西方、指妙空云、彼亂念佛大德、早可度云々、即大歡喜、度西方了、夢醒以後歡喜云、縱雖散乱心念佛功不虛歎云々、彼最^五後病時、尼妙緣夢云、從西方音樂迎來、有一人云、迎妙

空也、尼夢難云、極樂非少善根人生處、妙空是寺別當也、何忽

生乎、彼人答云、雖為寺司無罪云々、尼即信之、語彼人云、若

爾亦可迎我、答云、可過三日云々、尼夢醒云、我有此夢、虛寒

難知、我若過三年命終、必可信此夢云々、即如彼所言過三年死

去、彼尼是大道心念佛者也、又彼大德四十九日之間、或人夢

云、大德依病乘手輦往西方、木工允從五位下竹田吉見着白衣

衣隨從其後、到法界房前下輦、到東^{五ウ}緣下、若僧七八人許從

房中出、執妙空手、從高欄上而引上之、夢中思惟、依結緣善

聖衆引接、故諸僧來迎也、丈六仏像未造畢、故木工着白衣相

隨也、彼時於法界房修此^{故有此夢}、又円融院別當朝壽律師啓入道一品宮云、

一夜夢云、法皇有召、依物忌申障、御使不免、仍以參候、即

被仰云、諸正教中法花經第一、弥可奉歸依、以此由可啓一品

宮、又妙空之一類、蒙妙空引導、此事甚貴云々、夢中被仰之旨

如此云々、又有夢、如下出、^{六〇}

仁尋大德^{正暦元年十一月二日命終}

數十年間修西方業、是勇猛精進者也、每日所作盡修法花經長

講、初夜修彌陀悔過、後夜修法花懺法、又三時念佛、自余善

根隨時有勤、或時而弟子等俱修念佛、其時中間語云、我聞非

常音樂、汝等聞不、答不然云々、時々有如此事、受病之後少惱、

正念第七日示云、木仏即帰了、又云、有二□童來向我前、蹣

蹣帰了、第八日懲念佛、最後云、願以此功德云々、唱五字了、

其聲即絕、^{六〇}

住好大德^{正暦二年月日}

康諫大德^{正暦三年正月十五日}

禪滿大德^{正暦三年六月廿一日}

明會大德^{正暦三年六月廿三日}

相助大德^{正暦四年月日}

多武峯增賀上人之弟子也、為令修學所上送也、三業无重罪、

一心欣淨土、有時相語云、相助身非其人、學拙鑽仰、不如忘

眼前之名利、結後世之良緣、故偏勤結緣事云々、每日誦觀音真

言、又念彌陀^(合力)、至于臨^{セオ}終、道心堅固、一心念佛、向人所

陳者大感、最後[□]講法花經、講畢為成就最後十念、起居禮拜

十遍、但其病極重、杖人而起、身弱心強、見者亦感、不久命

終、後經數日、有人夢云、有人云、往生極樂有多路、一是廿

五三昧結緣之路也、余即余人之路也、三昧結緣路往生人多、

近曾一人往生了、余路極少云々、隨示見之、巖上有二路、一在

西方、一在東方、一路有五六人、路是三昧結衆路也、東方一

路唯有一跡、是余路也云々、此夢雖不云相助往生、彼死去後、

即有^{セウ}此夢、仍於此記之、

元凱大德^{正暦四年十一月七日}

仁靜大德^{正暦五年正月廿四日}

清榮大德^{正暦五年三月}

妙源大德^{正暦五年十二月二日}

救親大德

正暦五年

月日

政叡大徳

静安律師長徳三年七月二日
生年七十三月八日

神勢大徳長徳四年月日
生年

寂空大徳

敵運大徳長保三年正月十九日
生年四十六月

觀禪大徳長保三年四月十四日
生年

戒縁大徳長保三年四月廿六日
生年七十三月

念中大徳長保三年六月一日
生年四十三月

良好大徳長保三年六月十八日
生年廿一月

源純大徳長保三年六月十八日
生年

念敷大徳長保三年六月廿七日
生年廿五月

忠海大徳長保三年七月十一日
生年廿八年

敵誓大徳長保三年七月十八日
生年

敵秀大徳長保三年月日
生年

亘熙大徳長保三年月日
生年

明豪大徳長保四年八月廿三日
生年四十七月

信厚大徳寛弘三年三月七日
生年四十六月

明普阿闍梨寛弘三年四月七日
生年七十九月

數十年間修西方業、念佛讀經薰修有日、又千余日間修護摩法、
如此善根偏為淨土也、故昌生阿闍梨為同宿之日、陳彼所行云、
道心堅固、曾猛精進、後生之事、似不可疑、就中有一恠事、
深曉獨起、默坐無音、恠而聞之、偷有流涕之音、數尅推移、

尚以如此云々、彼明闍梨往年祈願、請知命期、夢云、生年六十
九是期也、至于其年受病、即生必死之想、而其年不死、至于
明年甚以為歎、春比示云、去年九月雖不死受病、當其時遂依此
病曰、命終者猶是往生夢之不虛也、懃懃祈之得此示現、決定
無疑、又往生之願更无所疑云々、仍待其終、不久命終、臨終正
念、々仏不退、葬送之煙直引往西、如曝白布、近里下人遙見
恠之、未知何由、後聞知是彼葬送之煙也、又有人夢云、明普
阿闍梨出來、即着美服、着納袈裟、手執香煙、面貌端正、身出
異香、驚問云、從何處來、答、從一〇〇西方來云々、于時心念言、
西方者近辺房名也、仍又問云、被坐近處歟、答云、雖在近處
是人難到之處也云々、又彼闍梨長逝數年以後、有人夢云、明普
內供往生先了云々、

明善阿闍梨寛弘三年五月廿七日
生年五十六月

性甚質直、心有慈悲、但對眷屬嗔恚不輕、發往生願、隱居念佛、
最後受病、久以辛苦、長病難堪、稍多懈怠、命終之後、
有兩三夢、有人夢云、「○」雖受苦不可久云々、嚴功大徳夢云、依
嗔恚受苦、過三月可生安養、有人夢云、第三生可生極樂、具
如下出云々、三夢雖異、大道相似、雖非順生、可遂本意歟、然
我等有願、而少行豈必期順生、縱經百生千生、尚喜生死有邊、
况二三生猶以為速、此夢若実、最可隨喜、

道朝大徳寛弘三年九月五日
生年七十九月

(流布本第四) 花山法皇(寛弘五年二月八日崩)
御生年四十一

捨金輪位、作沙門形、忝至尊之徽質、贊為一結之等侶、彼時
結衆挾一勝地、各立一卒堵婆、以占墳墓之處、降綸旨云、
現世昇沈上下雖隔、菩提依正、彼我何異、我與汝等、欲同事
矣、即依宣旨、二十五中心、立御願卒堵婆了、今依遺詔、
以御骨奉安置彼處也、仙骨俗骨共契東山之暮雲、聖靈凡靈同
期西方之曉月、御願之旨深以ニウ隨喜、抑聖靈帰花城、而
遷化、御臨終事難知、和光同塵、形迹不定、示善現惡、凡情
叵測、大權方便、不可輕議者也、

嚴久大僧都(寛弘五年五月十日)

良運阿闍梨

(寛弘八年正月廿三日
生年五十五)

每日所作多年不退、是精進之人也、計自生日、配若干日、修
不動供養法、近于臨終修種々善、生前所用三寶物、皆悉償之、
病中有人夢云、可生ニニヲ極樂、死後有人夢云、可生兜率、

念昭阿闍梨

(寛弘八年四月十三日
生年五十五)

俗姓小野、名為國、故道風朝臣之孫也、明經俊士也、在俗之間、道心堅固、偏念弥陀仏、偏修西方業、一夜夢云、有一鮋、來愁云、世間人見我皆云、是善者也、樞酢食之云々、先聞此言、心受大苦、次遭刀机、身受極苦、其心猶勝於身苦云々、夢中起慈悲、為彼鮋契云、自今以後我不食我汝云々、彼大歡喜、夢ニウ
覺之後、永以禁斷、又夢有一愛女、與彼共臥云、此女端止、而着美服、故深愛念、後術見之裸形、而形彌美、故彌愛念、

又術見之、其形醜惡、身中不淨皆悉顯現、即生厭離、不覺流涕、夢覺以後、目有余淚、仍隨寂照上人、出家入道了、入道之後道心弥深、持戒清淨、大小便利必以洗浴、質直柔軟、勇猛精進、一心念佛、竟夜不臥、默然流涕、凡厥三業罪過難得、最後七年、ニミオ身上無垢、衣中無虫、自余異相藏玉不顯、如伝聞者現見仏歎、來到當院後、見此結緣事、請入結衆、依請入了、即書結緣迎講式、并団聖衆來迎相、常以抱持、時々披閱、々々之時、無不流涕、近于臨終示云、於此講會深生隨喜、我今欲修云々、言已營修、其日受病、為治身病下洛、寄宿典藥頭和氣朝臣正世宅、即於彼宅命終、是宿緣之所追歎、伝聞、臨終正念、々々不退云々、但下洛之後、ニミヲ□源大德夢云、異香遍滿院內、有人云、此是念昭往生極樂之相也云々、其後死去、又康審大德夢云、念昭度海往西方、會迎講人皆相伴而行、

良陳阿闍梨

(長和二年三月廿八日
生年七十二)

多年隱居、念佛誦經及于臨終、慈悲忍辱、哀愍孤独、結緣仏事、懃懃助成、語門人言、宿習所牽從童稚時、念弥陀仏薰修已久、引接何疑、受病之後少惱、正念々仏不退、此間政円大德夢ニ四才云、莊嚴花舉、欲迎彼闍梨、命終之後尋得遺書、其書云、寛弘七年三月廿五日始聞音樂、日夜不斷、但在丑寅方恠思万千云々、但病中不聞云々、或說云、命終日、東塔北谷邊有聞橫川音樂云々、惠心院檢校尋円律師被送書狀云、六月十日曉夢云、丈六堂礼堂慶有阿闍梨・故良陳阿闍梨並坐、慶闍梨云、此阿闍梨

臨終示云、年緒經手思々之甲斐有手蓮之上野露都許曾居礼々云
和歌、于時良闍梨トシフハテヲモヒワモヒノカヒアリテハチスノウヘノヅニトコソキレ也
得意、學者等云、此闍梨心乖世儀、性是懦慢乖世、可助出世、橋慢可障、又云、見仏、法花經中、列八鳥疏以高飛、喻高慢、恐是彼慢心、障臨終見仏歟、又云、
依隨緣方、所生大和國云々、夢中思惟、往生極樂之後、生大和
國、可利益衆生也云々、又盛源大德夢云、於花台院修法事、彼
庭南邊招集廿五三昧結衆、次第令入室、聞其講師說法之音、
是故妙空大德也、又於堂內有七八許人之声、有一行事僧云、
年來以祥蓮蓮生為散花、今良陳阿闍梨新來、仍一五〇改以祥連為堂
達云々、此間故明普阿闍梨依次欲入堂、彼行事僧不許而返、被
面帰了、着盛源座、如此被返者有其數不委、次盛源起而欲入、
行事僧云、汝不可入、々此堂內者純往生人也、廿五三昧勝利
甚深、結衆中已往生者七八人也、當往生者其數亦多、汝於此
事、其志頗疎、辭導師役云々、盛源答云、未辭、又彼僧云、二
月辭了、欲猶返之夢覓云、每月十五日、念仏勸請導師處次差之、懷恥、懷恥一五〇
帰了、如本寺明闍梨同座、相共慚愧、又彼行事僧呵盛源云、
汝亦不可與彼闍梨同座、所以然者闍梨雖未往生、第三生可得
脫、汝無其期、不可生等輩之想也云々、又能茂大德夢云、於洛下
遇良陳阿闍梨乘車、而行見能茂歡喜云、幸得相會、今述所懷、
年來所欣極樂、既得往生、无歡喜無極、若有願行誰不生乎、
此由可示諸人云々、又有兩三夢、恐繁無記、抑彼闍梨夢告最可
信受之、若斷二六〇万縁、暫勵三業、離苦得樂、只在反掌之間、
見仏聞法何疑、閉目之夕既入宝山、願莫空手欽矣、又良陳阿

闍梨長逝、經數月以後、有人夢云、梵昭阿闍梨住定心房、故
良陳阿闍梨着美麗法服、來會語梵昭闍梨云、往生人事人人々不
審云々、仍為申案內故來也、已生極樂了、但初生在下品、今依
廿五三昧結衆念佛之力增進又了云々、有人問陳闍梨云、修何等
善、可得往生、闍梨不答、只動念珠、重問云、可然歟、即又
無言、合眼唯諾、一六〇

結衆外加記二人廿五外院内大衆於結緣事其勤皆同、不
流布本第五可偏言、非是結衆、故有別事此中記之
良範大德長保三年五月十四日

年令少壯、容貌端正、心性柔和、不逆師友、由此自有衆人之
愛敬也、于時世有疫難、多病死人、見此無常、偷發道心、閑
居念佛、刺血為墨、岡仏書經、即以隨身珍玩之物、奉供養件仏
經畢、受病之後、都不惜身命、人欲除其病、自只求早死、即
畢一七〇早生極樂、當度衆生、何惜身命、逗留苦海云々、仍偏念
仏、都無他念、父母之使日々到来、隨宜報之、命終之日、早
旦使來、為彼示云、雖存孝志命既不堪、當生淨土、奉報恩德
云々、其後高声念佛、傍有祈病者、以手推去、傍有念佛之人、
彼亦以手引寄尋常之時、相語件人云、我若受病、朋友得意必祈息、即告
看病云、可擊磬云々、即擊之、其音不高、病者云、磬音可高云
々、即大擊、其時病者一七〇頭北面西、右脇而臥、合掌對仏、高
聲唱云、南無阿彌陀仏、看病者相共加声、十度許了云、可停
念佛云々、停念佛了、合掌無解、瞻仰仏像力、寂而命終、凡其病
中氣色用意、勇猛堅固也、更非世間之人、看病諸人悲喜交至、

流涕恋慕、其命終時、源信僧都為彼亡者被修諷誦、其願文云、令繫念尊靈、得值遇大善知識、所請如件々、即被示本意云、我披善財童子善知識之文、知善知識為大因緣、今^{二八〇}憐忽赴冥路、無伴獨行、故欲令彼值大善知識々、其後有人夢云、遇善知識、不迷於道、我名為適意菩薩々、此似彼彼一念之引物也、又經數日、尋得平生隨身書卷、其中有血仏血經、其外題云、南無十方三世諸如來、命終決定往生極樂々、見者悲泣、感其深意、即彼遺骸上立一卒堵婆、奉安置件仏經也、噫乎年少用心尚以如此、何豈戴頭上之霜、強^{二八〇}求眼前之榮花乎、

仁儕大德^{寛弘五年十一月八日}

久發大願、念弥陀仏、就中老後數年之間、念佛之声昼夜不斷、其聲高大、殆滿院內、聞者隨喜、以為異也、人々夢云、仁儕決定^可往生極樂々、臨終之時語弟子利円云、弥勒四十九重光懸遠云々、利円難云、大師久念弥陀、偏欣極樂、今何臨終有兜率

相、答云、自有其故歟、只可奉任仏、^{二九〇}

聖念^{金承}

阿闍梨^{長和四年十二月廿九日}

修學相兼、不迷因果、勇猛精進之人也、住山之日在此結衆中間、隨請用暫經廻洛邊、後遁世隱居、山城國乙訓郡石作寺、於彼寺別結緣、亦修廿五三昧念佛、又閑居以後十五年間、每日二時修弥陀供養法六時念佛、各一万遍、十二時禮拜各百遍、盛夏極熱之比、礼拜懺悔之間、頭起黑煙、背流白汗、或時有人以扇助之、又別奉誦法華經四千二^{二九〇}百部、長和四年

二月示云、我命不可過今年云々、同七月受病、雖不堪禮拜、余行猶不闕、至于十月停止雜行、偏修念佛、十二月上旬示云、不於我前世間言語云々、即令誦往生集臨終行儀文、習其用心、同月中旬、舍弟僧康審送書問疾、返狀云、從去春自然作是念、今年必死、今受此病、所念不虛、何更問存不之由、偏可祈臨終事^{手迹}、廿七日令掃除住房、示云、死後既近云々、弟子等即驚、触示一兩要事、隨触一々弁定已了、廿八日集諸僧令念佛、即示云、^{二〇〇}布薩日可命終云々、手執梵網經、打磬、發願、一見已了、又至夜、令諸僧念佛、亦誦壽量品、亦誦往生集臨終行儀、示云、臨終十念勝百年修行云々、諸僧相共竟夜念佛、臨後夜、弟子僧紀明云、奉懸曼茶羅上有光明、暫有即滅、病者以糸着仏手、自執其末、并執自別願文、向西結定印、如入禪定長逝已了、布薩日命終、果如所言、^{二〇〇}

前權少僧都^{流布本第一}
源信^{寛仁元年六月十日入滅}

僧都本是大和國葛木下郡人也、父占部正親、母清原氏、家有一男四女、父雖無道心、性甚質直也、母是善女、有大道心、出家入道修西方業、有時夢見、我五子中一男三女、天人來下迎接而去云々、覓後解夢云、此四子俱可成聖人云々、其三女同出家入道、欣求淨土、第一女臨終正念、々仏命終、第二女命終之時、異香滿室、第三女現在是極善人也、書寫法花經、^{二二〇}恭敬頂戴矣^(補)、所住草庵往年燒亡、隨身資具皆成灰燼、唯此經一部在灰中獨有、其一男者僧都是也、其母求子、祈請郡內靈

驗伽藍高尾寺觀音、夢見、有住持僧、以一珠与之云々、不久懷任、即生男子、少年修年三長齋戒之間、於彼高尾寺、夢見、堂中
有藏、中有種々鏡、或大、或小、或明、或暗、爰有一僧、取一小
鏡与之、少兒陳云、此小暗鏡何用乎、欲得彼大明鏡云々、僧答
云、^(ニウ)彼非汝分、々々是也、持至橫川、可加磨瑩云々、于時不
知橫川是何處也、後有事緣、自來於此出家受戒、住山修學、
々業既成、為道英雄、論議決択、世稱絕倫、時赴公請、有所
得物、撰貴贈母、々泣報云、所送之物、雖非不喜、遁世修道
我所願也、即隨母言永絕万緣、隱居山谷、修淨土業、長和二
年正月一日所著願文云、生前所修行法、今略錄之、念仏二十
九俱胝遍、奉誦大乘經五万五千五百卷^(ニウ)_{一万卷}、^{法花經八千卷}、^{般若經三千余卷}、^{阿弥陀經等}、^{七万遍}、^{手呪三十万遍}并弥陀・不動・光明・仏眼等
等、奉念大呪百万遍千手呪七十万遍、其後所作亦有別記、此外又有一卷十余紙、書記
一生所作善根、其中或造仏像、或書經卷、或行布施、或助他
善、如此大小事理、種々功德、不能具記、又念仏余暇所撰法
門、有數部數十卷、往生要集三卷、一乘要決三卷、大乘對俱舍
抄十四卷、因明四相違疏注尺三卷、同斷纂注尺一卷等也、具
在別錄、件法門當朝盛^(ニウ)用之、多送大宋、寂照上人^{前二河守、本定入道名也}、
從宋朝送書云、往生集見在國清寺弘之、教主宗翌相逢示之、
又遣雙林迦和尚一封、送付使李送了、又義目一卷逢天台有識
令決畢、追可獻、又遣法相宗因明等、從五台寵歸、相訪其人、
可伝付之云々、又行迦和尚送書云、大宗國務州雲黃山七仏道

場住持沙門行迦書附日本國天台首楞嚴修西方淨業源信大師之
右、行迦自己丑去載、於^(ニミ)當府楊都綱處、領得大師盛作往
生要集一部三卷、披閱光義味、修廣以噲商人、心皎秋月、
行潔冰霜、承仏記於像末、宗教乘於遠邦、軌範法門、提携四
衆、精勤身意、恒念淨土、王上之師友、臣下之帰依、一方之
三寶興隆、全由臣力、余恨無羽翼、乏以浮盃、但望日邊、這
相瞻羨已上、兩朝弘法、前代未聞、誠是伝燈之師、豈非如來之
使、又往年有人、偷問云、和上智行世無等倫、所修^(ニウ)行法、
以何為宗、答、念仏為宗、又問、諸行之中、以理為勝、念仏
之業稱名可足、本存此念、故不觀理、但欲觀之、亦不為難、
我觀理時、心明通達、無有障礙云々、見其意氣、所解似深、今
靜思之、一念実相、万緣遮心、誰觀理時、明了無礙乎、是末
代希有之事也、蛇能知蛇足、智者自可知、抑僧都心无諂誑、
言不過實、故仰信之、又有時間云、和上何^(ニシテ)意不學真言、
答、性非聰敏、亦專念仏、故難兼功、雖不為業、非不貴也、
迦樓羅法門之喻、深以信帰、又久持千手陀羅尼、後更加尊勝
陀羅尼、滅罪之計、只在於斯云々、^{一仏乘欵}又近臨終、有人問因明義、
僧都示云、我本業在決択、志學○、此如法門是誤事也、不可
問之、速疾成仏之道、不如我宗教門、不深修學、追悔無益云
々、先哲一言、後人知之、從去長和年中受病、不堪起居、然
猶正念不亂、念仏不退、^(ニシテ)身分逐日枯竭、智力逐日長、比及

寛仁元年五月中旬、種々苦痛皆悉平愈、但久習右脇、都不余臥、多年雖在病床、攝身令不自恣、故五体曲向右、不得余威儀、凡厥身体有而若亡、唯有菩提心、堅固不動也、身雖非常、既免最後之苦痛、心是明了、不疑臨終之正念、因茲再三語人云、十五惡死、既免了、是久所祈也免十五惡死得十五善生、經久持此呢偏祈此事故云爾從六月二日、全不受飲食、同五日示云、夢見一僧來傍三五才、有人問云、此僧何人乎、僧答云、我來欲令全正念也云々、是臨終之相欵云々、同九日、早旦、以縷着弥陀仏手、自執其末、從法門中撰出二偈、自誦教人、誦云、清淨慈門刹塵數、共生如來一妙相、一々諸相莫不然、是故見者無厭足、又誦云、面善円淨如滿月、威光猶如千日月、声如天鼓俱翅羅、故我頂礼弥陀尊、又唱云、南無西方極樂世界、微妙淨土、大慈大悲阿彌陀仏云々、然後禮仏、以縷置仏前了、次自食如常、二五ウ又勸人令食、了問云、見我氣色免十惡死不、人々答云、身無苦痛、容顏如常、無惡死相、即示云、然也云々、次掃除住處之塵穢、洗淨身衣之垢染、触事似有用心、同十日朝、飲食如常、即拔鼻毛、淨身口了、執仏手縷念佛、然後如眠、給使之人雖在其側、只謂休息、都無用意、良久無音、仍尋見之、頭北面西、右脇而臥、入滅已了、面色稍美、容貌似咲、手執仏縷并念珠、二六オ兩手相合、少參差也、月來數誠門弟云、我臨終時、可問要事、生善惡趣、如實示之、又九日、偷示親昵僧云、我有所見、不語於人、年少僧等數類來坐、或三人為一類、或五人為一類、容貌

端正、衣服美麗、如此等事、閉目則見、若具言之、恐似狂言、最後當問云々、然人不知其時、誰問要事乎、為人為法悲歎無極、爰僧都弟子能救、年來居住近江國甲可郡石倉寺、去年十月到來、陳云、年令三六ウ老邁、不能行步、奉拜大師是最後也、陳了即歸、其後僧都送書云、明年春夏間、欲必相會云々、而自然有障、難遂本意之間、去六月十日、寅時夢見、能救到僧都室、僧都欲遠行、其路左右諸僧陳列、有四童子、形服甚美、左右相分、列僧而立、大途似橫川迎講儀式、僧都示云、以小童為先、以大童為次云々、依命調立已了、向西步行、能救夢中思惟、從地步行、此事恠哉、即時漸上、履空而行、三七オ口唱云、超度三界、々々々々、再三唱之、向西而去、夢覺以後、語僧法救・尼賢妙等了、彼此共云、僧都入滅欵、十八日、橫川僧壽尊別伝云、寔詒僧都云々來着、即問其由、答今月十日入滅已了、夢想有実、諸人驚感、又有一僧与僧都有師弟之契、入滅之後、欲知生處、數月祈念、夢見僧都、問云、生極樂乎、答、可言生、亦可言不生、問、何故云爾、答、纔免苦、故云爾、問、此言不明、實得生欵、答、然、問、既遂本意、為大喜乎、答、最為大喜、二七ウ問、若既得生、何故前云亦可言不生乎、答、聖衆雲集、囬繞仏時、我在最外、故亦言不生也、又問、自事云、我可生淨土、不、生乎、答、汝雖怠慢、有成仏願、此事善哉、譬如有人禁固深屋、若有智盧、自得逃免、成仏之願亦後如是、雖沈生死、可

得出離、問、若爾以此願、可生淨土、不、答、有願無行、猶以為難、問、若悔往日過、今增精勤者、可遂往生願乎、至于此間^{三八〇}暫不答之、少時思惟、答云、猶難、々々、凡生極樂、極難之事也、故我在最外、聞此事、已慚愧不少已上、依此夢想、憶彼旧事、往年自案經文、因弥陀來迎像、其中比丘衆多、菩薩衆少、有人問云、何故菩薩少、答、望下品蓮也、問、何不望上品、答、計已分也、又細尋彼臨終事、看病僧等云、近終焉日、令人讀無量壽經下品上中二生文、其意同前云々、今恐如彼願得下品蓮歟、如此示現所告雖多、夢難取信、故^{三八一}□繁記、然僧都智惠精進、世間無比、弘法利生、思慮巧妙、仏語不虛、因果顯然、豈疑後世安樂果乎、願以結緣力、早蒙引接矣、

禪珍大德治安元年四月十五日命終
生年六十五、結緣外加記

故加賀守藤原朝臣直連之孫也、出家之後、寄住參河國云々、來住此院、經數年矣、道心惟深、念仏不退、院內諸僧相共憐愍、三衣不全、一鉢數空、貧道之中最第一也、但有一白瓷小瓶、頗有愛惜之心、病間有人、^{アサムイテ}取而去、臨終時々、愁無此瓶、人雖加呵噴、猶似有遺恨、死去之後、夢告取瓶者而言、我此生可免生死、今依此瓶、更帰苦界、汝若為我立率堵婆者、可遂本意云々、依夢立了、當知昇沈在心非物、此故小物為容甚大、遠伝此事、欲誠後輩矣、

康審大德治安元年四月廿一日命終
生年七十一

（余白）^{三一〇}
仁宗大德長元三年八月日命終
生年七十九

梵照阿闍梨長元五年五月十八日命終
生年七十

^{三一〇}

前權少僧都覺超長元七年正月廿四日入滅
生年七十三

勇猛精進、道心堅固、早遁世俗、久欣淨土、行住坐臥、不背西方、往年同宿舍兄聖全阿闍梨房、^{三九〇}其房坐處不宜向西、強樂西面、當戶前面居、入出之人恒以為愁、兄諷諫云、向東向西可隨便宜、從京登山之時、豈不背西乎、弟報云、從西行東、戾身向角、未曾任背於正西方、兄即聞之、不覺涕泣云々、展軛聞者、可令落淚、生年六十八^{寛仁三年}記年來所作云、奉讀法花經一千一百五十部、阿彌陀經十一萬卷、普賢十願一萬六千卷、四十八願四萬八千卷、梵網經十重禁、法花懺法、奉印阿彌陀仏^{三〇〇}二百六十萬俱胝三萬六千億體、此從生日至于七十、每日配一俱胝仏也、奉念同仏一百五十一萬俱胝遍、自廿五至于三十、每日三萬遍、其後五六年六萬遍、自三十七之後、每日十万遍、奉念同仏大呢十七億遍、隨求陀羅尼一万一千七百遍、光明真言七百遍、阿彌陀小呢、尊勝大仏頂、阿嚕力迦不動仏眼等真言等云々、此中印仏數兼記七十寿、其事今不相違、誠可謂聖人哉、然今年世愁疫癘、^{三〇一}此間受病、仍有人問云、疫病歟、答不也、身少苦痛、心不散亂、臨終語看病人云、仏來、可掃路散花、看病人事云、無花、病者云、以紙可造色々花、如其示造花散了、頭北面、西合掌、氣絕矣、

寛喜二年秋八月十日夜書写之了、近日每夜染筆、或以後夜鐘為限、隨分至忘、押眠無何、哀傷甚多、仍故以書之、抑此記作者可尋之矣、或云、源信僧都述云々、源信逝去之後、覺超僧都書統之、覺超他界之後、無人于統之云々、相似沙門慶政敬以記之、

此記虫扱之次銘者乎、于時慶長 第十一丙午季春
下旬

前淮三宮入道沙弥円性

三二四

(余白)
(白紙二枚)

(裏表紙)

(補1) 河内國有一尼、往年借之、時時拜見、

(補2) 又自余事、隨問示之、能伺其最後、以軟語問之云々、

櫻齋院廿五三昧法華經過古懶
長和三年十一月十八日始記

長
和
年
七
月

首

古德緣今無緣固有寬和三年至平今年晚矣
八箇年也緣緣之初一舉共接之我亦可適性生
極乐係自取力係佛力為覺為夢示緣緣
人之盤七八年同祥連太極為始良陳園事為後
遇古友四十二人也此牛歲有陰陽用心花後夢想
頗似緣緣之幸而景此言為祥連賓後為園事

楞嚴院廿五三昧結衆過去帳 卷

光緒三年秋八月十四日良玉寫於
徐翁之後金鐘為限作於志樟齋
矣傷寒久而故以之為標其說不外乎
山脈傳循部述之脈傳者古之後覺起循部
六經之覺起他傳之說世人于後之不知也

同 卷尾

止就去就次年辛巳時慶長
先生丙午季夏下旬

卷之三

二百六十万僧祇三万六千住持徒比丘生日五十七
日既一住持佛也年八十有二一百五十一住祇
遍向蓋五千三千五百日三重遍之後五六十年
同三十七住持五百十万多住持念同佛在九十
五隨求泥羅尼一千七百多克_目真言七百多
何經說小瓦等勝大佛頂阿嚩力迦多劫佛眼
亦真言亦是此中下佛教魚記七十事王事
今多相違誠下漏主人引至今年世應較懷
之由多病但有人同名瘦病所生居不也即能
苦痛少發利從經讀者病人高佛禁可得
諸般氣者病人之世氣病之以身丁造色之
光必主示造死發_ノ此面西合掌氣絕矣

同 本文末